

太陽がぎらぎらと照り輝き、強烈な陽光を間断なく振り注がせていた。

左手の窓の外を見遣ると流るる景色があり、紺碧に染まりたる海原と、そして、群青色に染め上げられたる空の対比が実に美しいものであった。

そして、右手の窓には翠嵐すいらんが広がり、これもまた夏の陽光のもと緑が映えていた。

開け放った窓から吹き込んでくる風は適度に心地好い。入り込む風で、前髪が大きくなびきながらもヴィヴィオはその流れゆく景色を眺めていた。

隣の席にはアインハルトも坐っている。彼女は同様に木々で覆い尽くされた山々を凝然として眺めているのであった。

運転席には母親たるなのは、助手席にはもう一人の母親たるフェイトが坐っている。

家族旅行であった。それが持ち上がったのはヴィヴィオが夏休みに入る前であった。ただ、夏休みになれば簡単に行かれるというわけでもない。一番不規則な勤務体系のフェイトの休暇がいつ取られるかが焦点になってしまった。

今年に限っては学院の夏休みに入っても、なかなか取れる状態ではなく、ようやくフェイトの休暇日程が決まったのがつい二週間前であった。そこから、どうにかこうにか予約を取りつけて、本日に至るわけである。

ヴィヴォオとしてはリオとコロナも誘おうかと思ったが、彼女らは彼女らで家族旅行と被ってしまった、夏休みは暇だと聞いていたアインハルトを誘ったという形であった。

「そろそろだね」

なのはが独りごちるように言った。自宅から高速道路を経由し、海沿いに走るルート十三号線をひたすら南下するという、休憩を挟んでおよそ四時間の旅であった。

タラスまで四キロメートルという道路標識を確認すると、遠目ながら彎曲しているビーチが見えてきた。その海岸に沿って低層の建築群が並んでいた。

クラナガンのずっと南にある保養地であり、タラスと呼ばれている。いまいちぱつとしない、多少不人気な場所と聞いているが、海水浴場に温泉にと狭い地域に通りの保養施設がひしめいているのである。

市街地に入ると、車の流れもゆつくりとしたものになった。

「人がいっぱいだね」

ヴィヴォオが呟いた。

「夏休みはどここんなものだよ」

なのはが応ずる。たくさんの人で賑わっており、あまり人気がない保養地というのが嘘のように思えた。流石にあまり人気がないと言うてもこの時期に賑わっていないようであると、未来は暗いものでしかない。

市街地に入ってからカーナビゲーションの指示に従う。程なくして、予約しているホテル・オシアニアに着いた。ホテルと言うても五階建ての小ぢんまりとしたものである、強い陽射しのもと白亜のコンクリートが映えており、乱反射した陽光で思わず目を細めた。車を駐車場に停めて、なのはは一息ついた。

「やっと、着いた」

ギアをニュートラルに入れる。後ろの二人は降りる準備をしていた。しかし、フェイトは一向にそうしようとせず、不審に思ったなのは彼女のほうに振り向いた。居眠りしているフェイトの姿が確認でき、思わず微笑んだ。

ようやく休暇が取れたということで、休暇前に仕事をなるべく片付けようと超勤が続いていたのだ。その疲れが取れ切っていないのであろう。

この眠り顔をずっと見ていたがそうはいかない。

「フェイトちゃん、起きて」

揺さぶるも反応はない。もう一度揺さぶるも先程と同様である。

今度はその頬を突いてみた。柔らかく弾力のある皮膚であった。やはり、反応はない。完全に熟睡している。

楽しくなってきた。次は何をしようか。悪戯したい気持ちも自然と孕んだ。眠っている人間には定番であるが、やはりキスなどどうだろう。

「なのはママ」

ヴィヴィオが冷ややかな口調で促した。娘がじととした目つきでなのはを射抜いている。なのはは残念だと言わんばかりに軽く溜息をついた。

さて、最終手段である。思いつきり揺さ振った。

フェイトが軽い悲鳴を上げながら起き、周りをきよろきよろと見廻した。

「フェイトちゃん、やっと起きた……」

「あ、ごめん、寝てた？」

「うん、ずっとね。もう着いたよ」

「ええ！ ごめんね」

慌ててシートベルトを取り外して、その勢いで降りようとするものだから、天井を頭につけた。これにはなのはもヴィヴィオも大笑い。

「あのう、フェイトさんは結構落ち着きがないのですね」

「まあ、そうかもね」

アインハルトがヴィヴィオに小声で訊いた。

トランクから荷物を取り出し、ホテルへと入った。

陽光を彩光せられるようにしており、解放感溢れる内装であった。強烈な陽光は、窓ガラスのフィルムである程度減光せられて、幾分か柔らかくなった陽の光がカーペットを洗い上げている。

「予約していた、高町です」

「高町様、お待ちしておりました——」

なのはが応対している間、アインハルトとヴィヴィオは窓の外の景色を眺めていた。このホテルは山際の高台にあり、そこからはタラスの街並みと海岸を眺望することができる。海岸は多くの人で賑わっているように見えた。

「いいところですね」

「そうですね。あの海で泳ぐのは楽しそうですね」

談笑していると、なのはが鍵を持ってやってきた。

ルームキーを渡して、

「二人は三〇二号室、私達は三〇一号室ね。荷物を一旦置いて、三十分後にここに集合ね」  
「はい」

なのはとフェイトは部屋に入った。ダブルベッドがあり、広さとしては二人の寝室と同程度であった。落ち着いた調度品と内装が、ささやかな高級感を演出していた。荷物を床に置いて、フェイトはいきなりベッドに坐り込み、少し溜息をついた。

「もう、フェイトちゃんたら、来るだけで疲れて」

「うーん、ごめんね。前日まで引継ぎがあったから……」

「少し根を詰め過ぎだよ」

微笑しながら言う。

なのはは置いた荷物を整理していると、通信音が鳴った。フェイト宛のものであった。

「はい、フェイトです。ああ、その件かあ」

フェイトの副官シャーリーからの通信のようだ。否応なしに聞こえてくる会話を聞く限り仕事に関することらしい。休暇中の上司に判断を仰ぐことは普通ならぬであろうが余程判断しかねる事態なのか。

「こっちにもその資料送ってくれるかな」

今の発言になのはも眉を顰めた。

我慢できなくなり振り向くと、既に資料を表示したディスプレイが立ち上げられており、それを前に気難しそうな表情のフェイトがいた。凜々しいのであるが、折角の保養地でこのような仕事に勤しむ表情を眺めるのは興醒めだ。

なのはやおら近附いて、

「フェイトちゃん」

「なに、なのは？」

首を傾げる。

「その仕事今やらなきゃいけないもの？」

「えっと……」

返答に詰まる。画面の向こうでシャーリーが、

『いえ、それほど急ぎのものではなく』

慌てて説明する。なのははうんうんと頷いて、資料を映されているディスプレイを消した。

「え、何するの？」

「お仕事禁止！」

なのはが高らかに言うて、フェイトの両肩に手を置く。

「いい、フェイトちゃん？ 私達は休暇に来ているんだよ。休みに来たの」

「うん、そうだよね」

「そうなら、こういったときくらい仕事のことは忘れようよ。いや、忘れて欲しいんだよ」

「ただ、ちょっとした用件だから」

「駄目。仕事禁止」

全く険とした様子はない、勿体ぶった講師の言い方であった。

「はい、わかりました」

フェイトは項垂れながら応じた。そのしゅんとした姿を見て、なのはは微笑した。

「シャーリー、というわけで、いいかな」

『わかりました』

ディスプレイ越しの副官シャーリーも微笑を以て応じて、その画面は霧散した。

この人の仕事中毒はどうすれば治るものだろうか——なのははたびたび思うことがある。

いや、中毒は言い過ぎであったと即座に反省した。何事にも真面目なのだ。ひたすらに真面目過ぎて、どのことにも真剣に向き合わんとするものであるから、このように仕事と家庭を両立しようとして、いつもこのような有様になる。

さて、いつまでも項垂れているフェイトを見ると、なのは自身も辛気臭くなりそうであった。

「さ、フェイトちゃん、行こうか。二人が待っているよ」

笑顔で言うと、フェイトの表情が少し柔らかくなった。



合流して四人は外に出た。ちょうどお昼時である。まずは昼食だ。

「その前に何食べる？」

フェイトが訊いた。

「何がいいかな」

ホテルのロビーで貰った観光ガイドを見ながら、店を決めた。近くにカフェがあるから、そこに行くことにした。

海岸沿いを通るルート十三号線に面したるカフェテリアであった。屋外席も常設せられており、冷房が効いた屋内席に坐りたいところであるが、既に満員だ。贅沢は言つてられず、止むを得ず屋外席に陣取つた。

四人はお勧めメニューであるシーフードスパゲティを揃つて注文した。

屋外席はパラソルが据え附けられており、日光の直射を避けられるが暑いことに変わりはない。冷房が効いた屋内で食事をしている人達が恨めしく感ぜられる。

「暑い……」

早くもフェイトのお冷がなくなつてしまい、フェイトがだらけてきたので、なのはが「しっかりして」と言いながら手団扇で仰ぐ。その光景をアインハルトは訝しむような目で見てゐる。最初はしっかりとした印象を抱いたのであるが、随分とだらける人であるなという印象を抱きつつあった。

「ママ、私のお冷あげようか？」

「ああ、いいよ、貰うから」

すっかりと日焼けしきった店員を呼びとめて、追加の一杯を貰うも、それもすぐに煽り切ってしまう。

「遅いね」

「まだ注文して五分も経っていないよ」

苦笑する。空腹時の五分は長い。

もう少し気長に待つべきであろう。この暑さの中、会話はなかなか弾まない。猛暑というのは活力を奪う恐ろしいものであった。

半ば無我の境地に足を踏み入れようとするとする四人。何も考えずに待っていると、にわかには険とした声が昼時の緩やかな空気を切り裂いた。

「はあ、——した？ 馬鹿じゃないの！」

思わず声の発せられた方向に振り向いた。帽子を被った気の強そうな亜麻色の髪の女性が一番奥の席にいた。サングラスをかけており、表情は窺えないが、怒っていることに相違はない。

その女性の前に男性が坐っており、申し訳ないといった感じで何度も頭を下げている。流石の大音声で注目が集まってしまったのか、女性はややしまったという感じで頬を赤

らめた。

「あちゃあ」

なのはが苦笑しながらその様子を見守っている。フェイトも同様だ。

声を抑えながらもその女性は男性に対してくどくどと文句を言っているように見えた。

「喧嘩でしょうか」

アインハルトが首を傾げながら言う。典型的な恋人同士の喧嘩であろう。

「放っておいていいんじゃないのかな」

なのはが言う。夫婦喧嘩は犬も食わないものである。恋人同士の喧嘩も似たようなものだ。

「そうそう、ああいったのは、時間が経てばね……」

フェイトとなのはは互いに視線を絡ませて、苦笑いを浮かべた。

「あの、失礼ですが、お二人もよく?……」

アインハルトがおずおずと訊いた。

「それはどうかな?」

「うん、そうだね」

なのはもフェイトも曖昧な笑顔を浮かべるばかりで質問に応えようとしない。

「そうですか」

「実はね、この前も喧嘩したんだよねえ」

ヴィヴィオがにやにやしながら言うのと、なのはもフェイトも即座に頬を赤らめた。

「こら、ヴィヴィオ」

なのはが慌てて叱責めいた声をあげた。毎度くだらない理由で起こる喧嘩をばらされてはたまったものではない。大抵はフェイトが暴走が主因であるが。

「わかってますって」

澄ました表情で舌を出すと、アインハルトがくすくすと笑った。

フェイトは後ろを振り向いた。まだ言い争っているというよりは一方的に文句を垂れている格好であった。

ふと、その女性と視線が合ってしまった、彼女の動きが一瞬硬直した。慌ててフェイトは視線を反らした。申し訳ないと思いつつも、部外者としてはつつい様子を探いたくなるものである。フェイトは居直ると、

「お待ちせしました。シーフォードスパゲティです」

そこでようやくお待ちかねの料理が運ばれてきた。オリーブオイルの香りが鼻梁をつき、食欲をそそらせる。

料理が運ばれてくると奥の喧嘩なぞどうでもよくなってしまった。

食事を終えて、四人は海岸へと出た。時期が時期だけにそれなりの混みようであるが、貸しもののパラソルを立て自分らの陣地を確保せられる程度のスペースはあった。

水着姿のアインハルトとヴィヴィオが真先に駆け出して、海に入っていく。

「二人とも、気をつけてね」

譁然<sup>かぜん</sup>としているなか、フェイトが大声で注意喚起した。一方のなのはそれを微笑ましそうに眺めている。

さて、自分らも海で泳ごうかという前に、夏の花辺と言えば、定番のあれがある。

にわかにはフェイトはなのはのほうに邪な視線を頻繁に向け、身体をもじもじとさせた。なのはが寝そべった。フェイトは心の中で拍手した。

「フェイトちゃん、オイル塗ってくれる？」

夏の花辺と言えばこれである。何回やってもこの興奮というか、心の中から沁みだしてくる喜びの形容しがたさと言ったら！

背中が美しく適度に肉付きがある。適量を取り、ゆっくりとなのはの肌のうえに伸ばしていく。ずっとこうしていたい気持ちを抑えながら塗って行く。常にリミッターは暴走を抑えようとしている。

「フェイトちゃん、変なことしたら後で晩御飯抜きだからね？」

「わかってるよ！」

冷ややかになのはが言うと、半ば抗議口調で応じた。塗り終わったところで、攻守交代である。

今度はフェイトが寝そべり、オイルを塗られる番となった。

なのはに負けじ劣らず見事なまでなプロポジション。同性ながら見惚れてしまうほどの白い肌は陽光のもとその美しさが惹き出されている。

大人しく塗っているのはであるが、卒然として悪戯心を孕んだ。とうのフェイトは緊張している感じである。毎回々々塗られる側に廻るとフェイトは身を固くするのである。

「フェイトちゃん、もっと力抜いて」

「だってえ」

そういうフェイトの首筋をそつとなぞる。

「ちよっと、くすぐりたい」

「力抜けたでしょう」

「ああもう、私のときだけじゃないよ」

そう抗議するフェイトの表情を見て、なのはは破顔せざるを得なかった。

年甲斐もなく塗合いでじゃれ合う二人を露知らざるに、ヴィヴィオとアインハルトは熱心に水泳をやっていた。

「次は何をします?」

ヴィヴィオが肩息な様子で訊いた。とうのアインハルトも呼吸が荒い。既に肩慣らしとばかりに砂辺と沖の往復を三度やっている。

「素潜りはどうでしょうか」

「いいですね。底に手をつけて、早く上がって来られたら勝ちというのは?——」

「それでいきましよう」

互いに息を大きく吸い込んだところで、クリスが合図を出した。

一気に潜る。水の抵抗は思った以上にきつい。しつかりと目を見開きながら、底を目指していく。流石に海底になると透明度は悪いものであった。

先に着いたのはアインハルトであった。すぐに海底を蹴り、その反動で一気に上がっていく。息はもう限界であった。息を吐き出しながら、水面を目指した。

水面上に出ると同時に大きく息を吸い込む。勝ったと無意識のうちにガッツポーズを取る。

ところがヴィヴィオが一向に上がって来なかった。

「あれ、ヴィヴィオさん?……」

漏らした声に若干の焦りを孕んだ。

これは大変だと察知し血相を変えた瞬間、突如として足が引き摺られた。素頓狂な悲鳴

を上げ、バランスを崩した。

ようやくヴィヴィオが上がった。舌を出しながら、

「はははは、驚きました?」

悪戯であった。よく行われる縁起でもない悪戯である。

「もう、驚きましたよ!」

アインハルトが猛然とした様子で抗議した。相当に怒っていることは確かだ。流石のヴィヴィオも狼狽して、

「あ、ごめんなさい」

「いえ、その、あまりにも怖かったもので」

取り繕うような謝罪にアインハルトも声を落とした。やや空気が悪くなった。

ヴィヴィオも継ぐべき言葉が浮かばなかった。その帳を破るように、

「ヴィヴィオ、アインハルトちゃん」

なのはの快活な声が飛んできた。傍らのフェイトはビーチボールを持っている。

しかしながら、なのはとフェイトは二人の間に漂いたる幾分か険悪とした空気を察知して首を傾げた。

「二人とも、どうしたのかな」

「私が性質の悪い悪戯を——」



ヴィヴィオが素直に説明しようとすると、

「もしかして、潜って上がって来ない悪戯？」

フェイトがどんぴしゃで言い当てる、ヴィヴィオは弱々しく頷いた。

「ああ、それは歡心できないなあ」

「本気にしちゃう人もいるからね。そういつたのはあんまりね」

なのはの次にフェイトが告諭すると、彼女はさらに項垂れた。

「そうそう、フェイトちゃんみたいにすぐ騒いじゃう人もいるからね」

「ちよっと、それは言い過ぎだよお」

フェイトが顔を真赤にして言う。

「いやいや、フェイトちゃんはいつも大袈裟。すぐに本気にする。この前だって——」

「だから、止めてって！」

声を上げて後に続く言葉を遮ろうとする。

フェイトはたと自分が置かれたる状況に気が附いた。周りの人間の注意を集めている。それを認識すると顔が瞬く間に陽にやられたように紅潮した。

「うー、なのはの意地悪」

そこでフェイトを除いた全員が笑った。その笑いで剣呑とした空気もどこか吹き飛んでしまった。

その後、ビーチボールに興じたり、ヴィヴィオの提案で競泳を行ったりといった楽しい一時が続いた。

休憩の時間。出店の休憩所でかき氷をつついていると、遠くからの雷鳴が聞こえた。

曇った表情で外に出ると、北方に油然として積乱雲がわきたっているのが見える。夕立だ。これは一雨来そうである。

「そろそろ撤収しようか」

なのはの提案に無言で皆賛同した。他の海水浴客も同じようなことを考えており、ビーチは急速に閑散とし始めた。

ホテルに戻った瞬間、空が光り、耳を聳<sup>ろう</sup>するほどの雷鳴が鼓膜を震わせた。そして、叩きつけるような音が窓越しからでも聞こえた。先程までは参るほど暑かったというのに、気温も低下して幾分か寒く感ぜられた。

「うわあ、ぎりぎり」

ヴィヴィオが嘆息した。危うくずぶ濡れになるところであった。

「また、夕御飯のときにね」

なのはが言った。

「食堂で集合でいいかな」

フェイトが場所を指定した。二人は軽く頷いて元気に返事をした。

空を覆い尽くしていた雲はとうの昔に流れ去り、天球には色とりどりの宝石が散りばめられており、それらは思い思いに煌めいていた。

未だ乾き切っていない地面に注意しながら、フェイトはその身を露天風呂に沈めた。このホテル自慢の温泉だそうさ。

白く濁った温泉からは湯気ももうもうと立ち込めている。掛け流しせられる泉水の音が響いている。

その白濁した湯の中に肢体を沈める。少しの間、浸かっているとその白い肌はすぐに薄い桃色を呈する。湯船の中で筋肉をほぐしていく。最近は事務仕事が続いていた身で、今日の激しい運動だ。ここでほぐしておかないと明日は大変なことになるであろう。

誰もおらず、さしづめ貸切状態である。やや遅めに来て正解であった。誰もいないものであるから、無意識のうちに目を瞑り歌を口ずさむ。

突として戸が開かれる音が響いた。はっと目を開け歌を止めた。  
油断していた。

「フェイトちゃん、何で歌止めちゃったの？」

振り向くと残念そうな顔をしたのはが佇んでいる。顔が紅潮した。

「ちよつと恥かしくてね」

「そうかな？」

なのはもゆつくりとその身体を湯の中に沈めた。

「ヴィヴィオは？」

「もう寝ちゃったみたい。アインハルトちゃんもね」

相当疲れているのであろう。

申し合わせたかのように沈黙が訪れた。二人の息遣いと掛け流しされる湯の音、時折吹く、まさかと思うほど冷たい夜風が木々を騒がせた。

沈黙は悪いことではない。ただ、一緒に並んでいるだけでも互いに充分であった。

二人は湯の中で手を握った。湯の中であつても、互いの体温は容易に感ぜられた。身体がどんだん火照るのを感じた。湯に浸かりすぎたせいか。

フェイトはふと隣にいるのを見遣る。頬も耳も紅くなっている。横から見えるうなじ、そして朧気な星と月明かりのもと、濡れた亜麻色の髪は実に艶めかしい。

フェイトは自然と身を寄せた。

「フェイトちゃん、他人が来ちゃうよ？」

「大丈夫だよ」

「その自信はいつでもどこから来るんだろうね」

「なのはが傍にいるからね」

「はいはい、私を褒めても、お小遣いは上がりませんか？」

「違うのに……」

「わかってるって」

フェイトはなのはの顔を真正面に見据えて顔を近附けた。なのはは全てを受け入れたかのようにそつと目を閉じた。

そして、互いの唇をゆつくりと合わせた。

そのままなのはをさらに抱き寄せたまま、唇を合わせ続けた。互いの体温がより身近に感ぜられた。

ようやく引き離して、二人は片息であった。

「もう、フェイトちゃん苦しいよお」

「ごめんね、なのは」

「もっと優しく」

なのはは彼女の頬を優しく撫でた。フェイトはゆつくりと頷いて、再び唇を重ね合わせたのであった。

木々がにわかに騒つく。火照った体が一気に冷やされた。

「そろそろ出ようか」

フェイトの提案になのはは無言で頷いた。続きは部屋に戻ってからだ。湯から上がると夏の夜の生温い冷たさが二人の身体に容赦なく纏わりつく。

突如、露天風呂の向こうの林から音が聞こえた。フェイトとなのはは意図せずして歩みを止めて、音の方向に視線を向けた。

月明かりのもと、それは仄かに照らされた。正体は判然としないが動物であることは確かだ、いわゆる下賤な人間がいたわけでない。そうであるから、なのははすぐに興味を失い歩き出すも、フェイトは息を吞んで、その動物を凝視した。一步、その方向へと踏み出すとそれは脱兎のごとく林の中へと消えて行つたのである。

「どうしたの？」

「いや、何でもないよ」

フェイトは絞り出すように発した声は湯気とともに夜の帳の中に漂つた。

朝方と言えど、この時期の陽射しは実に苛烈なものである。窓から射し込む光はじりじりと部屋の温度を上げていった。暑さと眩さでなのはは目を覚ました。